

デスチュ・ド・トラシの 経済学と産業主義

米 田 昇 平

序

コンディヤックの『商業と統治』（1776年）における重農主義批判と、それに対するボードーやル・トロヌの反応は、旧体制末期のフランス経済学の錯綜した状況をよく示している。コンディヤックは効用価値説に基づいて、自然法の明証性をより所にするケネーの形而上学的体系を批判したが、彼の経済学の構成そのものはおもにカンティロンの議論に回帰するものにすぎなかったし、ボードー等の反論も重農主義の固定観念から一步も出るものではなかった。これ以前にも、フォルボネやグラスランは欲求の論理ないし効用理論に基づいて重農主義の偏頗性を批判したが、この批判はケネーが切り開いた資本理論の可能性を押し広げるものではなかったし、また重農主義の内部においてもチュルゴを除けばこのような資本理論の敷衍化の試みは行われなかった。知られるように、ケネーやチュルゴの資本理論を批判的に摂取して独自の経済学体系を築いたのはスミスである。こうして、革命期とその前後を通じて、フランス経済学はスミス経由でより敷衍化された資本理論を手に入れ、これを組み入れたのである。スミスの資本理論は労働とともに生産資本の所有者に経済の主導的担い手の地位を与えるものであったから、これの受容によって、地主社会論を唱える重農主義に批判的な陣営はより有力な理論的根拠を得たことになる。こ

れ以後、動産所有優位論は革命の政治的坩堝によって鍛えられ、地主イデオロギーの復活を阻止しつつ、資本と労働の協働による産業社会の構築によって新たな社会的統合を目指そうとする、いわゆる産業主義の思想に結実していくことは知られる通りである。

このような産業主義の流れを集大成したのはJ・B・セイとデスチュ・ド・トラシ (Destutt de Tracy, 1754-1836) であったといわれる。革命期から19世紀初頭のフランス産業主義は、重農主義やルソー的平等主義に代わりうるフランス社会の再組織化の一原理を示すものであったが、彼らの経済学はこの原理に包括的な理論的基礎を与えたと考えられるからである。本稿はトラシの『意志とその諸結果について』(*Traité de la volonté et de ses effets*, 1815) に焦点をあて、彼の経済学の特質を探ることで、この時代の産業主義の一つのあり方をその理論的基礎に遡って浮き彫りにしようとする試みである⁽¹⁾。それによってまたわれわれは18世紀以来のフランス経済学の諸潮流が、スミス経済学などの受容や革命によるフランス社会の変容を介して、どのように19世紀に継承されていったかの一端を垣間みることができよう。

(注) (1) この書物はトラシの連作『イデオロギー要綱』の第4部(経済論)と第5部(道徳論)にあたる(ただし第5部は未完)。大部分をなす第4部は前半の3部作(認識論・文法論・論理学)で構築された科学方法論を経済社会の研究に適用しようとしたものであり、トラシの経済学の主著と目しうる。トラシの著作や略歴などはさしあたり津田内匠「デスチュ・ドゥ・トラシの産業主義」『経済研究』第44巻第3号(1993年)を、またフランス産業主義の性格規定については、この論文とともに、カンティロン以降シャブタルまでのフランス経済学の展開を産業主義の形成の視点から詳細に跡づけた、同じ著者の画期的な論稿「フランス革命と産業主義」『年報』(成城大学経済学研究所)第3号(1990年、4月)や、Edgard Allix, “J.-B. Say et les origines de l’industrialisme,” *Revue d’Economie Politique*, 24 (1910), pp. 303-13, 341-63, 岩本吉弘「シャルル・デュノワイエと「二つの産業主義」—王政復古期における産業主義と自由主義—(前編)(後編)」『一橋論叢』第117巻第2号(1997年2月)、第118巻第2号(1977年8月)などを参照されたい。本稿

はとりわけ上の2つの津田論文に多くを負っている。なお本稿では1818年の第2版の復刻版(1984年)をテキストにしている。

1. 効用と労働

イデオログの旗頭の一人であったデスチュ・ド・トラシの経済学の体系的構成を基礎づけているものは、18世紀以来の欲求と効用の論理であり、さらにはトラシなりに敷衍化されたコンディヤックの感覚論哲学と科学方法論とであった。すなわちトラシもまたコンディヤックと同様に、われわれの認識と行動を導く唯一確かな基準を感覚に求め、この感覚的印象から生じる誰にも既知の一次的な真理から出発して、さまざまな派生的な諸原理を演繹し、経済的知識の体系を築こうとするのである⁽¹⁾。

トラシはいう、何であれ事物の存在の認識を与え、それゆえあらゆる観念や思考を与える原因はわれわれの感覚である、われわれはこの感覚による印象と認識の結果として欲求を感じ、欲求を満たそうとする意志に導かれて様々な行動を行う。「人は感じることなくして欲することはできない」(p. 56)から、この意味で意志の能力は感受能力の様式であり、人はこの意志の能力に導かれて何かを欲し、その欲求を満たす手段を求めめるのである。あらゆる演繹的推論の出発点はここにある。トラシはこの欲求は人間の権利であり、それを充足するための最善の手段を講じることは人間の義務であるという。このような欲求と手段、あるいは権利と義務は排他的所有(固有性)の観念を前提にするが、この所有の観念もまた意志の能力から生じる。感覚的存在としての人間が抱く様々な感覚的印象の結果として欲する感情と行動への意志が生まれるが、同時にそのような感情や行動に対する抵抗を感じることで、「私とあなた」あるいは「私と私以外のもの」という自我や人格の観念が形成され、これとともに排他的な所有(固有性)の観念が形成されるというのである(p. 70)。それゆえ彼には所有の観念は自我の観念と同じくまったく自然的であり、人間の考え出したあ

らゆる人為的な制度を超越している。このように感受能力の一様式としての意志の能力は所有（固有性）の観念を発生させ、欲求と手段、権利と義務の観念を生み出し、それゆえ富と欠乏の観念を生み出す。なぜなら「豊かであるということは欲求を満たす手段を持つことであり、貧しいということはこれらの手段に欠乏していることだからである」（p. 88）。こうして意志の能力は自らの欲求の満足とそのため的手段を求め、欠乏と苦痛を避けようとするが、このような意志の能力の自己実現はもっぱら意志を行使する自由が保証されてはじめて可能であることはいうまでもない（「感覚的かつ意志的存在の自由とは、全体としてその持つ諸能力を自由に行わせる力にはかならない」p. 104）。

社会的結合の真の目的もまた、協約を通じて、お互いに損じ合うことなく各人の意志の能力を結集し各人の力を高めることにあり、自由の行使が部分的に制約されることがあるとしても、それはより重要な自由の行使を保証するためである（p. 105）。彼はいう、「社会はもっぱら持続的な交換の連続」（p. 131）であり、誰もがこの交換を通じて欲求を満たし、「絶えず再生する」途切れることのない有利を得ることができる。なぜなら、交換は相対的に無用なものを与えて有用なものを、言い換えれば主観的により小さな効用（用役）を与えてより大きな効用を得ることだから（「私に支払う人は私が与える用役を彼が私に見返りに与えるものよりも多く手に入れる」p. 134）、交換が自由に行われ交換当事者が過たないかぎり、双方ともに利益を得るからである。さらには交換を目的とするこのような社会的結合によって、1. 結合労働（協働）のメリット、2. 才能に恵まれた人物による発明などの知識がただちに共有され普及するという知識の増大のメリット、3. 自らの性向に最も適した職業に専門化できるという社会的分業のメリットが生まれ、欲求充足のための手段あるいは交換の対象物を豊富に手に入れることができるからである。このように、交換を通じて「絶えず再生する無数の小さな利益の積み重ね」が文明社会の驚異的な経済的「進歩」をもたらし、この経済的進歩と人類の知的な進歩とが相まっ

て人間全体の厚生を著しく高めたのである。トラシは自然と社会のあらゆる無秩序によってこの進歩が攪乱され中断させられることがなければ、「境遇の改善を求める人間の努力」はさらに高い水準の進歩をもたらしたはずだとさえ考えている。このような文明の成果は「用役の相互性と交換の多様性」の結果であり、まさしく commerce をその本質とする社会の必然的な結果であった (pp. 136-146)⁽²⁾。

こうしてトラシにとって、欲求を充足しうる手段あるいは欲求や願望を満たしうる効用 (有用性) を有するものは何であれ富である。「われわれが望むことはただ享楽を増大し苦痛を軽減することである」(p. 157) から、われわれに喜びと満足の感情を与え、苦痛や欠乏を除きうるものは何であれ効用を有する。この意味で彼は、宝石、金属、土地、道具、食料品、住居だけでなく、自然法の認識、技術的方法、言語の使用、社会的協約、社会制度もまたわれわれの欲求を満たす手段を豊かにし、われわれの厚生を高める富であるという (pp. 88-9)。トラシはセイに倣って、生産とは、物にわれわれの欲求を満たす形態を与え、またはそれが存在する場所を移動させることで、「物にそれが持たなかった効用 (有用性) を与えることである」(p. 148) と述べている。それゆえ効用を生み出す労働は何であれ生産的であり、農業労働だけが生産的なものでは決していない⁽³⁾。農業と製造業のインダストリーは「あらゆる存在物をわれわれの用途に適するものに換えるために加工し変容させる」(p. 165) ことで効用を創造し、また商業のインダストリーは商品の過剰な地域からそれが不足する地域への商品の輸送 (場所の移動) によって商品の有用性の評価を高める。このような効用の創造の観点から、トラシは農業者と製造業者をともに製造し加工する製造者であるとして同じ一つのジャンルに入れ、彼らを輸送に従事する商人とともに有用な労働を行う生産的階級とする一方で、この階級を真の不妊階級である有閑階級 (ラント取得者) から明確に区別するのである (pp. 155-6)⁽⁴⁾。

以上のようなトラシの富観と社会観が、富の生産とは人間の欲求に応じ

うる効用の創造であり、文明社会における交換の本質は効用（用役）と効用の交換にあり、したがって社会的結合の原因と目的もまた交換を通じての効用の増大であるとする18世紀以来の、また進んではセイにまでいたる「欲求の体系」の論理の基本的枠組みを継承するものであることは明らかである。フォルボネはcommerceの包括的概念に基づく商業的経済観に立脚して、文明化の動因を「欲求の相互性および交換の相互的効用」に求め、コンディヤックやグラスランはフォルボネなどの「欲求の体系」の構想を継承しつつ、それを価値論のレベルに純化して効用価値説を展開し、その立場から効用と効用の交換は主観的には不等価交換であることを明らかにした。またビュテル・デュモンは、人々の活動を導く欲求充足というモチベーションの妥当性を快樂と苦痛の原理に基づく功利主義の哲学によって根拠づけるなど、18世紀のフランスにおいて「欲求の体系」の論理は、多様なベクトルを示しつつも確固とした一つの精神的土壌を形成していたこと、そしてそれは論争的側面でいえば、彼らの重農主義批判の共通の論拠でもあったことは、かつてわれわれのみたところである。トラシは功利主義の快樂と苦痛の原理を感受能力の様式としての意志の能力から導き出すなど、独自の意志論から欲求の論理を演繹しようとするが、その基本的構成は、直接にはコンディヤックとセイを通じて受け継いだ18世紀以来の欲求の論理の枠内にあるとみることができるのである。例えば、交換を主観的には不等価交換であるとみるトラシの見方はコンディヤックの議論を受け継ぐものであるし、また効用の創造の観点から商業をも生産的であるとみなす見方などは、フォルボネやコンディヤックやセイの、あるいは広く18世紀の重農主義批判の流れを汲むものである⁶⁾。

ただしトラシは他方でスミスの価値論の影響を受けている。彼は効用の創造の源泉を労働に求め、この労働を意志の能力の現れとすることで、意志論からの展開とスミスの労働価値説的な議論とを重ね合わせるのである。労働とはわれわれの始源的所有に属する「物理的、道徳的能力の使用」であり、その目的は何であれ自然の存在物にわれわれの用途に適した

効用（有用性）を与え、欲求充足の手段を満たすことで、「享樂を増大し苦痛を軽減する」ことにある。労働はまさしくわれわれの意志の能力の現れであり、「われわれの唯一の始源的な富であり、あらゆる他の富の源泉であり、それらの価値の第一の原因」であった（p. 124）。それゆえ彼にはあらゆる財はそれらを生み出した労働の表徴にほかならない（p. 91）。こうして財の価値と労働の価値とは一体のものであり、前者は後者に規定されることになる（財は「最初にそれに要した労働と、その後それによって免れることのできる労働の二重の価値を有する」p. 90）。

しかしながら、このような議論が彼の体系のなかで労働価値説として貫徹していくわけでは決してない。労働は労働者の生存のために満たされることが必要な欲求の総量としての自然的かつ必然的な価値を有し、財の自然的価値はこれに規定される。彼はこのかぎりでは財の価値は労働という共通の価値尺度によってはかることができるという（pp. 91-2）。しかし労働と財は他方では「社会の自由な取引の結果として生じる価値」、すなわち協約的価値ないし売上価値を有し、この価値はその労働や財がどれほどの効用をもたらすと一般に評価されるかに規定される。トラシは、この二つの価値の関係を価格メカニズムの分析を通じて明らかにしようとするどころか（ただし売上価値は長期的には自然的価値よりも小さくはなりえないことは指摘されている）、むしろ両者は互いにレベルが異なり「ほとんど何の関係もない」（p. 395）と、両者の関係を切断した上で、財と労働の価格を最終的に規定するものは、もっぱら後者の効用にかかわる一般的、社会的評価であるとする。彼はいう、「この協約の価値、この売上価格は生産者と消費者、買い手と売り手の欲求と手段に応じて変化する、なぜなら私の労働の所産は多くの労苦と時間を要したが、……売り手が大勢いれば、あるいは人がそれに支払う手段をわずかしか持たなければ、私はそれを低価格で与えねばならないからである。……したがって売上価格は様々な事情や売り手と買い手の平衡作用に左右される、しかしそれでもなおその売上価格が物の価値とそれらを生産する労働の有用性の尺度であ

ることに変わりはない」(p. 161)。こうして労働は価値すなわち効用の源泉ではあっても決してその尺度とはなりえない。価値の尺度はあくまでその財がどれほどの効用を有するかに規定され、そのことはどれほどの労働が投入されたかによってではなく、諸種の事情に左右される社会的評価によってもっぱら規定されるのである。トラシの価値論が効用価値説としても労働価値説としても貫徹しえない半端な体裁を示すものにすぎないことは、以上により明らかである。全体としてそれは上でみた欲求の体系の論理の基本的枠組みに触れることなく、効用の創造の原因としての労働の意義を、スミスの議論を援用しつつ、しかし自らの意志論からの必然的展開として示したものだといえよう。意志の能力から生まれる物理的、道徳的能力の使用である労働こそは「あらゆる富の唯一の源泉である」という真理が演繹されれば、彼には十分であったのである。

トラシはさらにその真理に基づいて富の分配の不平等が必然的であることを論証しようとする。富の不平等は個々人の物理的、道徳的能力の自然的な不平等に由来するものであるから、結果としての不平等は必然的であり、また「社会の基礎は個人の能力の自由な行使と、その手段によって獲得しうるものの保全でなければならない」(p. 264) から、意志の能力を行使する自由と所有権の保全の観点から、この不平等は容認されねばならないとされる。このような自然に反して人為的に平等を確立しようとする試みは、個々人のインダストリーの活動を消滅させ、貧困と欠乏の平等をもたらすにすぎない。こうしてトラシにとって不平等は人間が従うほかない「必然的な悪」であった。ただし、結果としての所有の不平等という事実に基づいて人々を所有者と無産の非所有者に区別したり、さらには所有者を土地の所有者に限定することはまったく間違っていると彼は考える。貧しい者でも自らの身体、労働、その労働の稼得の所有者であり、所有に無縁の者など存在しないからである。そこで彼は所有者と非所有者の区別に代えて、社会階層を稼得者(賃金労働者)と雇用者とに区別する。雇用者とは稼得者を雇う賃金ファンドを有するラント取得者と企業者のことで

ある。稼得者と雇用者の利害はそれぞれの立場のかぎりでは必然的に対立するが、しかし両者はともに所有者であり、また消費者であるという2つの側面において共通の利害関係によって結びついており、したがって所有権の尊重とインダストリーの増大の2点に関して、国民は共通の利益を有するとされる。所有権の保全は雇用者のためばかりか、稼得者にとってもその身体や能力や僅かな財産の保全とそれらの自由な行使のために、また彼らを雇う賃金ファンドの保全のためにも有利であり、他方でインダストリーの増大は消費財を豊かにすることで消費者一般に利益を与えるからである。トラシはここでは賃金ファンド（資本）の所有者であるか否かによって、社会階層を稼得者と雇用者とに区分し、しかも両者の利害は上の2点に関して一致すると説くのである。こうして所有権が保全されてインダストリーが増大し続けるかぎりは、あるいは経済の成長が持続するかぎりは最下層の人々の安楽は増加し続けるから、所有の不平等という必然的な事実が階級的な利害対立を顕在化させることはない（pp. 262-270）。

しかしトラシはこのようなスミスのようなオプティミスティックな一般的富裕の観念をただちに否定し、この「繁栄状態は必然的に一時的なものである」（p. 274）として、むしろ pessimistic な展望に引き寄せられていく。未耕地の存在や技芸の進歩などを通じてインダストリーが増大する余地がなおあれば一般的な繁栄は持続され、これに応じて富と人口は増加するが、しかしこの余地が失われ、しかも他方で人口増加圧力が同じままにとどまるとすれば、たちまち人々の生活水準は低下し、各階層であぶれた人々はより下位の階層に転落し、最下層の人々はもはや生存を許されないこととなる。こうして「ある程度の発展に達したあらゆる諸国民のもとでは人口はほとんど停滞的となる」（p. 289）。発展した諸国では新たな雇用機会は容易には創出されえないとすれば、労働供給が労働需要を上回って稼得者あるいは零細な企業者などの貧困化が避けられない、と彼はいうのである。

セイは人口は食料に規定されるというマルサスの人口法則を基本的に了

解しながらも、しかし自由貿易（食料の輸入の可能性）を前提に、人口は食料それ自体によってよりもむしろインダストリーあるいは国民的な生産力の水準によって左右されると考えた。トラシはセイのこの議論を敷衍し、人口は生存手段（食料）に直接に規定されるのではなく、「人口は常に生活手段に比例する」（p. 278）として、セイと同じ立場からマルサスを批判している。ここでいう生活手段とは食料を含めて人間の生存を維持する物的、知的資源の全体である（「それはわれわれの技芸や科学、すなわちわれわれの知識の全体がわれわれに提供する何らかのあらゆる資源に存する」p. 278）。しかしながら、セイがその販路説に基づいてスミスとともに、生産力は企業者の再生産的消費（投資支出）によって自己増殖しようと考えた（それゆえセイにとっては人口増加圧力は決定的な貧困の原因ではない）のに対して、トラシは成熟した国ではインダストリーの増大による生活手段の増大と新たな雇用機会の創出あるいは賃金ファンドの増大はもはや困難であり、それゆえ人口増加圧力が決定的に貧困の原因として作用せざるをえないと考えた。賃金ファンドの増大が困難な理由は次の通りである。まずラント取得者の賃金ファンドは、農業の改良による生産量の増大によって地代が増える場合のほかは常に一定である（金利の上昇によって貸付資本のラント総額が増えることがあるとしても、それは企業者の収益を減少させ企業者のファンドを減少させるにすぎない）。他方で企業者の賃金ファンドもまたほぼ一定である。企業者は自己資本の収益と企業活動による収益からなる企業者利潤を節約して年々資本を増加するといわれるが、そのようなことは真実ではないとトラシはいう。なぜなら、

1. 企業者は事業に失敗することも多い、
2. 富を手に入れた人々の多くが働くことをやめて無為の有閑者の仲間入りをする、
3. より決定的な理由は、有利な投資機会が既に満たされれば何らかの新たな販路が開かれなにかぎり、他の投資機会を損なうことなく新たな機会を生み出すことはできないからである。したがって、企業者の賃金ファンドはラント取得者の場合と同様にほぼ一定にとどまるのである（pp. 291-2）。このように賃金

ファンドがほぼ一定にとどまる一方で人口増加圧力が同じままであれば、貧困の発生は不可避であろう。トラシによれば、富裕な成熟した文明国における富と人口の停滞と貧困の発生の原因は、おもに投資機会の枯渇に起因する企業者利潤と賃金ファンドの停滞にあったのである。このようなトラシの議論にフランスの悲観的な現実とマルサスのペシミズムとが色濃く投影していることはいうまでもない。

このようにトラシは投資機会と雇用機会が枯渇した成熟した国では、あぶれた人々は貧困にあえぐほかない事情を直視する。しかも彼にとっては「生か死か」という生存自体が危機に瀕した貧民の救済は、人類愛の見地からだけではなく国民の大多数の困窮を救済するという正義の見地からも、また国家を強力にするという政治の見地からも、何より優先されるべき課題であった。したがって、社会の最大多数をしめる最下層の人々の利害と他の階層の利害とが対立するときには、「選ばれるべきは常に最下層の人々の利益」でなければならない (pp. 294-6)。トラシにはスミスのな調和的な一般的富裕の観念の幻想は既に明らかである。また彼はいう、社会組織の目的は支配と従属の有害な関係をもたらす権力の不平等を解消ないし緩和することであるが、能力の発達に応じて富の不平等が拡大すれば、教育と能力と影響力の不平等が生じて権力の不平等がふたたび顕著となり、社会を転倒させる恐れがある。それゆえ社会を維持するためにも富の不平等の行き過ぎを抑制し、権力の不平等への傾向を阻止しなければならない (pp. 319-322)。ではトラシは過度の不平等を緩和し、貧困の問題を解決するためにどのようなビジョンを描いたのだろうか。彼の示す解決策は、1. 労働の所有者としての貧民の所有権の尊重、2. 消費者としての貧民の利益のために技術革新による生産性の向上と低価格の実現、3. 生産者としての稼得者と企業者の勤労階級内部での連帯、あるいは労働と資本の協働によるインダストリーと賃金ファンドの増大である。最初の2つは既にみた稼得者と雇用者あるいは貧者と富者との連帯の主張に連なっているが、最後の論点はこのような主張を大きく踏み越えて、労働と資本を生

産的に組織する企業者機能を称揚する一方で、有閑階級の存在の不毛性を徹底的にあばこうとする。われわれはこれらの次第を検討することで、トラシの構想する革命後のフランス社会の再組織化の方向がどこにあるか、あるいは彼の産業主義の特質がどこにあるかを窺い知ることができるであろう。

(注) (1) トラシとコンディヤックの関係については、Daniel Klein, “Deductive economic methodology in the French Enlightenment: Condillac and Destutt de Tracy,” *History of Political Economy*, 17:1 (1985) を参照されたい。

(2) トラシは一方で、人間に生まれつき備わった同感という自然的性向が社会的結合とともに強まり、おのずから社会的、道徳的関係を築くと述べている。社会を安定的に維持する原因は、このようなスミス伝来の同感の原理と、ここで述べた人々の力と意志の協働がもたらす有用性への人々の理解である (pp. 128-130)。

(3) 重農学派は農業のみが生産的であることの根拠を農業における自然力の協働に求めたが、トラシはセイとともに自然力の作用は農業に固有の事情ではないとし、さらに生産の本質を効用の創造にみることで重農学派のドグマを否定した。人間のあらゆるインダストリーは農業のその場合と同様に、自然の化学的、機械的な力を利用して人間の欲求を満たす財を生産する、「農地は真の工場であり、……畑は真の道具であり……、あらゆる場合にそれは炉や金槌や船のように、人が生み出したいと望む結果に必要な道具」であり、他の道具との違いはただ畑は移動できないということだけである (pp. 152-3)。

(4) トラシはこのように効用の創造の観点から重農主義とは異なる階級区分を行う一方で、農業の優位性、農業者と地主の利害の一致などの重農主義の根幹にかかわる議論を全面的に否定している。ごく一部の肥沃な土地を除けば農業企業者の利得は僅かであり、彼はこの利得の少なさを農地の量的拡大によって埋め合わせることはできないから (たとえ十分な資本を持っていても一人で広大な農地の経営を行うことはできない)、農業は有利な状況にある場合でも骨の折れる実りの少ない職業でしかない、したがって農業への資本の投入は他の部門で資本の運用ができないやむをえざる場合にかぎられる (「それゆえ多くの資本を農業に向けさせる唯一の手段は資本が他で過剰であるようにすることで」 p. 201)。またほとんど資力を持たない農業企業者は、もっぱら地代収入を得ることを目的として土地を購入する富者から土地を賃借りするほかない

が、そのことは借入資金の利子の返済のために事業収益が常に圧迫され、めったに成功の望めない他のインダストリーの企業者と同じ立場に彼を置くことになる。大借地農であっても事情は同じことである。こうしてトラシにとって、自然の協働の得られる農業は最も有利な部門であり、農業への人為的制約が除去されれば、資本と労働はおのずから農業部門に向かうとする重農主義の農業優位論はまったくナンセンスであり、さらに地主に投資者としての役割を期待し、地主と農業者の利害の一致を説くのも、貨幣の貸し手と借り手の利害は一致すると説くに等しい「奇妙な」論理であった。トラシには高価で土地を賃貸しする地主は「最も貪欲な高利貸し」(p. 183)と変わるところはなかったのである。

(5) コンディヤックは、効用価値説の立場から、交換は当事者にとっては主観的には不等価交換であるがゆえに、交換によって総効用が増加し富の総量が増えたと考えた。拙稿「コンディヤック『商業と統治』(1776年)について」(柏崎利之輔教授退職記念論文集編集委員会編『経済学の諸相』, 学文社, 1998年に所収)を参照されたい。また「スミス経済学の祖述者」といわれるセイの場合にも、このような欲求ないし効用の論理は受け継がれており、スミス批判の論拠として用いつつ、セイがそこから商業の生産性や無形の生産物の概念を導いたことは周知のことであろう。

2. 企業者と支出循環

トラシは貧民の労働所有は、どこに一般的利益があるかが理解されなかったために十分に尊重されてこなかったという。稼得者を雇う企業者はインダストリーの発展のためには低賃金が必要であるとして、労働所有あるいは労働の自由を束縛しようとしてきたが、それはむしろ一般的利益に反すると彼は考える。確かに輸出を不可能にするほどの高賃金は有害だけれど、過度の高賃金は長続きしないから懸念するには及ばないとする。なぜなら過度の高賃金は産業を衰退させ労働需要を減少させる一方で、労働者数を増加させ労働供給を増加させるから、二重の圧力によって賃金はおのずから低下するからである。そうして彼は、奴隷や農奴を用いていた諸国の例が典型的に示すように、最下層の人々があまりに不幸な国でこそインダストリーの衰退が生じたという歴史的事実を強調し、むしろ労働の自

由によって賃金が増大し貧民の安楽が増大すれば、彼らの道徳的、知的能力は高まり、雇用者の富も増大するであろうと述べている。それゆえ「貧民に最も大きな自由とそのわずかな手段の最も完全な利用を与えるべきである」(p. 302)。トラシはこのような労働の自由とともに、海外移民を含めた稼得者の移動の自由、さらには賃金の安定化と一次的必要品の価格の安定のために商業の完全な自由を求めている。われわれはこのように労働などの自由を貧民の救済手段として捉えたところに、トラシの自由主義の一特質をみることができよう。ただし彼は労働の自由がなにゆえに賃金を高め安楽を増大しうるかという重要な論点に関して、ほとんど理論的解明を試みていないし、またこの賃金上昇の経済学的意義に説き及ぶこともしなかった。

一方、消費者としての貧民の利益は必需品を潤沢にかつ安価に手に入れることである。このためには「技芸のやり方を単純化し短縮する生産方法の改善や機械の発明」(p. 314)が最も有利であるとして、彼は生産性の向上によって低価格を実現する産業技術の進歩に強く期待する。この技術革新への強い期待はセイと共有のものであり、彼らの産業主義の中核的要素の一つであるということが出来る。機械の使用などによる労働の節約はむしろ賃金を引き下げるとの批判に対しては、彼は次のように応えている。賃金ファンドがほぼ一定であるときには、個別の労働に対する支払いが減少しても、余って節約された部分は他の対象物の生産に移動した労働への支払いに向かうから、同じ数の労働者に同じ賃金が与えられることに変わりはない、また何よりこのようなコストの引き下げによる低価格の実現は、消費者の購買力に余力を与えることで新たな販路を開き、新たなインダストリーと新たな投資機会をもたらし富の増大をもたらすから、賃金ファンドそのものの増大を可能にする。技術革新は消費者としての貧民に低価格の恩恵を与えるばかりか、新たな販路を開くことで企業者の投資意欲を駆り立て、労働者の雇用機会を拡大するのである。同じ効果は道路や運河の建設などによる経費の節減によっても発揮される。トラシはこのよ

うな技術革新はときとして最初のうちは部分的な苦痛を労働者に与えるが、社会が全体として繁栄するときには一時的に苦境に陥った労働者を救済することは容易であると述べている (pp. 314-7)。

以上のように、彼は貧民の利益のために労働所有の保全あるいは労働の自由と技術革新による必要品の低価格を求めたが、しかしこの貧民の利益はただちに所有者一般あるいは消費者一般の利益に一体化され、前節でみた所有者および消費者としての稼得者と雇用者の連帯、あるいは貧民と富者との連帯が強調される⁽¹⁾。ここに革命後のフランス社会の再組織化の原理あるいは新たな社会的統合の原理を求めようとするトラシの苦心が窺われるが、しかしこのような連帯の主張は、彼自身が述べていたように、繁栄が持続するかぎり階級的な利害対立は顕在化しないことを示すものにすぎない。それゆえ、それは投資機会と雇用機会の枯渇による貧困の必然化と過度の不平等の同時存在をどのように緩和するかという課題に十分に応えないばかりか、むしろ現実の矛盾を糊塗するものにすぎないようにも思える。トラシはこのような曖昧な社会的統合の原理の根拠づけから大きく踏みだし、不妊的な有閑階級と生産的な勤労階級の階級区分に再び立ち返り、生産者としての企業者と稼得者の連帯によるインダストリーと賃金ファンドの増大の可能性を追求する。それはまた雇用者の一方の当事者である有閑階級の不毛性、すなわち彼らの奢侈的消費の不毛性を徹底的にあげくことでもあった。

企業者と稼得者との連帯ないし協働を主導するのは、生産の組織者としての企業者である。雇用者あるいは賃金ファンド（資本）の所有者は、既にみたようにラント取得者（有閑階級）と企業者に区分されたが、彼はここで前者を有閑な資本家、後者を活動的な資本家と呼んでいる。稼得者の賃金がこれらの雇用者あるいは資本家の賃金ファンドから支払われることはいうまでもない。稼得者は賃金の全額を消費支出するか、もしくはその一部を節約して資本家の地位に上昇しうるが、いずれにせよ彼らの支出は雇用者の間接的な支出と考えて差し支えない。雇用者のうち有閑な資本家

の収入は、地代や貸付資本の利子などの支払いを通じて企業者によって与えられることもまた明らかである。トラシは、有閑な資本家はこの収入を享楽のために支出し、不妊労働を養うことで大勢の人々に生活の資を与えるが、「この種の資本家の消費は再生産との関係でみれば、絶対的にまったくの損失であり、それだけ獲得された富を減少させる」(p. 335)と述べている。一方、活動的な資本家(企業者)は、自己資本ないし借入資本を生産的労働の雇用などに投じて生産活動を行うが、この投資的支出(生産的消費)は利潤をともなって回復され、この利潤は彼らとその家族の欲求の充足のための消費支出および借入資本の利子の返済にあてられる⁽²⁾。この利潤が消費支出分と利子返済分の合計よりも小さければ、賃金ファンド(資本)が食い潰され事業は縮小するが、逆の場合にはファンドは増大し、事業の拡大と労働需要の増大をもたらすことができる。トラシはこの企業者だけが社会的富を増加し、あらゆる享楽の手段を創造しようとする。それというのも、あらゆる富の源泉は労働であるが、「彼らだけが蓄積された労働を有効に用いることによって現実の労働に有用な方向を与えるからである」(p. 341)。企業者は資本の用途に応じて労働を有用な方向に導き、これによって生産され実現された価値を分配することで他のあらゆる階層の人々を養うのである。こうして、生産資本と生産的労働の協働を導く企業者の主導性は、次のような企業者を起点とする支出循環として示されることになる。「循環の出発点は生産が行われる地点である。インダストリーの企業家は実質的に政治体の心臓であり、彼らの資本はその血液である。これらの資本によって彼らは稼得者の大部分に賃金を与える、彼らは土地や貨幣を所持する有閑なあらゆる資本家にラントを与え、彼らを通じて残りの稼得者に賃金を与える、そしてこのすべてはこれらのあらゆる人々の支出を通じて彼らのもとに戻る」(pp. 338-9)。このような支出循環の構想が地主の支出を起点とするケネーの循環論の組み替えであることは明らかである。トラシはスミスの資本理論やセイの消費理論の骨子を、ケネーに着想を得た独自の企業者起点の支出循環論によって表現しよ

うとしたのである。

ただシトラシの議論はそのような独自の構想のゆえに理論的欠陥を抱え持つことになった。企業者の主導性の根拠は、彼らが資本部分（賃金ファンド）を上回る利潤を獲得することにあるが、彼はこの利潤は生産物が費用よりも高い価格で販売されることによって発生すると考える（p. 337）。すなわち、企業者の生産する生産物価値は賃金ファンドの回収分と利潤（借入資本への利子の返済分プラス企業者の自由処分可能分）の合計からなるが、この生産物の価値実現額がどれほどか、したがって利潤あるいは企業者の自由処分可能な分がどれほどかは、もっぱらこの生産物に対する購買力の水準にかかっている。しかし既にみたように、この購買力は企業者自身、稼得者、ラント取得者のそれぞれの購買力の合計であり、しかも稼得者とラント取得者の購買力は企業者がそのすべてを与えるのであるから、結局、企業者は生産物の販売を通じて自らの支出総額を回収するにすぎないことになる。言い換えれば、予め実現された生産物の価値総額が企業者によって支出され、この支出を起点とする消費循環を通じて企業者は支出総額と同じ額を回収するにすぎない。ここでは利潤を含む高価格が先決的に与えられており、このような高価格や利潤が国民的購買力の水準に依じてどのようにして形成されるかは何ら明らかではない。この意味で、マルクスが指摘したように⁽³⁾、トラシは利潤が企業者によってどのように支出されるかを説明しただけで、それがどのようにして発生するかは何ら説明できなかった。それゆえ企業者が利潤のうち自己消費分を節約して生産的労働の雇用を増大することで余剰生産を増大したとしても、この増加分を吸収して利潤の増加をもたらさうる購買力はどこからも与えられない。要するに、このような円環的な支出循環論は堂々巡りの循環論法に陥るほかになく、それによっては利潤の発生 の根拠も再生産の拡大の論理も示すことはできないのである。

同じ事情は基本的にケネーの地主起点説にもみられる。そこでは穀物価格を維持することで前払いと地主の「収入」を維持すべき国民の購買力

は、純生産物の価値実現額であるその「収入」の水準に予め規定されており（収入の支出→国民の購買力→農産物需要→価格の維持→資本の回収→収入の回復・支出）、このような円環的な消費循環からはどのような発展の展望も導かれなことはかつて指摘した通りである⁽⁴⁾。ケネーにとっては経済発展の展望は、フランス農業の過小生産を前提に、内外商業とくに穀物輸出の自由化と恣意的税制の改革によって穀物需要を増加することで穀物価格を基礎価格（生産費＋地代＋租税）を上回る良価の水準に維持し、これによって生じる農業利潤を追加的に投資に向けることによって再生産の拡大（あるいは過小生産の解消）を目指す論理として示される。このようなおもに『経済表』以前の諸論稿で示された需要の増大を契機として螺旋的な発展過程が導かれるとする構想それ自体は、この発展過程の内実の違いを別にすれば、ボワギルベールの過少消費説的な螺旋的發展論を引き継ぐものであり、またそれはトラシと同時代のシスモンディの過少消費説にも通じるものである。このように彼らの論理では過少消費の解消が螺旋的發展の契機として措定されていたが、これに対しセイの販路説では、生産物はその生産と同時に他の等価の生産物に対して販路を開くとされるから、再生産的消費（投資支出）の増大による生産の増大には必ず需要がともなう⁽⁵⁾。過少消費説的な螺旋的發展論であれ、セイの販路説であれ、生産の拡大を保証する購買力は外在的あるいは内在的に与えられるが、トラシに独自の企業者の支出を起点とする支出循環論ではそのような保証はどこにも存在しない。トラシの企業者主導論はこのような理論的欠陥を抱え持っていたが、しかし過度の不平等を緩和し貧民を救済するために彼がどこまでも依拠したものは、生産資本を労働と結合することでインダストリーと賃金ファンドの増大を導くことのできる企業者機能であった。彼は富者の奢侈的消費の不毛性と対比しながら、このような企業者機能を際立たせている。最後にこの次第を彼の奢侈批判にみてみよう。

トラシは上でみた企業者主導論に基づいて、奢侈擁護の論拠を次々に論駁しようとする。奢侈は多くの人口を養い、流通を活発にするという議論

に対して、トラシは、富者の奢侈的消費支出が大勢の稼得者を養うことは確かだが、彼らの労働は何も新たな富を生まない不妊の労働であるから、彼らへの支出は既に獲得された富の破壊にほかならないこと、またそもそも富者にラント収入を与えるのは企業者であるから、これらの労働を養うのは有閑な富者ではなく企業者であること、それゆえ循環の起点となり終点となるのは企業者の賃金ファンドと利潤からの支出であるから、流通を活発にするのは一回かぎりで消尽する富者の奢侈的消費ではなく、企業者のファンドや利潤の増大とこれらが流通に投じられる頻度の増大とであると反論している。さらに彼は、消費が生産の原因であるとみなし、社会的富は私的富とは異なって消費の増加によって増加すると考えるガルニエなどの議論を「観念の転倒」とであると批判する。確かに生産の目的は消費であり、消費者の欲求に応じるものでなければどのような生産も無意味である。この意味で消費は生産の尺度であり、インダストリーの増大のためには市場を拡大しなければならない。しかしだからといって無差別に消費を増やせばよいというものではない。豊かな消費物資を享受するためにはその生産が消費に先行しなければならないが、これを可能にするのは企業者の生産的消費であって、富者の奢侈的消費ではない。したがってもし基本的にそのすべてが消費支出にあてられるラント取得者の収入が企業者の手にそっくり残されれば、生産的消費のためのファンドは著しく増加し、インダストリーと消費物資は大きく増加するであろう。このようにトラシはチュルゴ、スミス、セイなどと同様に生産の内在的条件としての生産的消費（投資支出）の意義に着目し、利潤の奢侈的な消尽ではなく、利潤の節約による投資ファンドの増大を求めるのである⁽⁶⁾。こうして彼はいう、「奢侈と呼ばれる悪しき消費および一般に有閑な資本家のあらゆる消費は有効であるどころか、一国民の繁栄の手段の最大の部分を破壊する」(p. 356)。奢侈は有閑な人々の破滅を通じて彼らの手からファンドを企業者の手に移すという間接的な有用性しか持ちえないのである。トラシはまた虚栄心を伴う奢侈的嗜好は道徳的退廃をもたらすばかりか、この嗜好は次第

に上流階級から中流・下層にまで広がり、生産的に用いられたはずのファンドまで無用な支出に向けられるようになるから、富の源泉を涸らしてしまうとも述べている (pp. 344-356)。

以上のように、トラシは有閑者の奢侈的消費ばかりか、彼らの一般的な消費支出でさえも、それに資金を与えることで企業者的資本家の投資ファンドを減少させ、国民の繁栄の手段を損なうと非難する。しかし彼はこのように生産の内在的条件である節約＝投資を強調するのみで、投資意欲と投資機会を企業者に与える誘因の分析にまで踏み込もうとはしない。トラシは奢侈を虚栄心に駆り立てられた過大で余分な支出と規定して、その不毛性を論難しようとしたが、実はおよそマンデヴィル以外の奢侈擁護論者にとってもこのような奢侈は過度の奢侈であって、必ずしも擁護すべき対象ではなかった。フォルボネの場合に典型的に示されていたように、勤労意欲の誘因としてまた消費需要に転じて生産を刺激する誘因として彼らが称揚したのは、おもに生活の改善欲求に導かれた中庸な奢侈的欲求にほかならなかったし、また彼らの奢侈擁護論を「消費の自由」論として集約したビュテル・デュモンは、生産の条件として(奢侈的)消費支出よりも投資的支出を重視する立場から奢侈を批判したボードーの資本理論の批判的検討の上に、あらためて投資意欲と投資機会の誘因としての奢侈的欲求・消費の意義を論じた。したがって、トラシの奢侈批判は経済学の観点からみれば、奢侈擁護論の本質を射抜くものでは必ずしもなかったといえる。ただ、奢侈を批判した重農学派やスミスが、他方では自然的秩序の観念に基づいて、投資的支出の増大による生産の拡大はおのずから階級間の利害の調和や一般的富裕をもたらすと説いたのに対して、トラシが奢侈の擁護は過度の不平等と貧困の存在を擁護するに等しいと批判したコンディヤックやアベ・ブリュケなどの議論を敷衍し、重農学派やスミスの資本理論をそうした議論に組み込むことによって貧困の問題に答えようとしたところに、彼の奢侈批判の独自の意義をみいだすことができよう。すなわち、賃金ファンドの増大とは無縁な用途に収入を支出する有閑者の財産が巨額に

のぼるような富の過度の不平等は、国民的富を損ない貧困の原因となるが、このような収入が企業者の手に渡り、生産的消費に支出されるならば、それに応じて雇用と富が増大し貧民の窮状が改善されるとトランシは考えたのである。ここでいう富が富者の奢侈的欲求に応じうるものではなく、国民の大多数をしめる貧民の一次的必要を満たす物資の豊富を意味していることはいうまでもない。フランスの現実には節約＝投資の増大による雇用の増大とともに、このような物資の生産の増大を何より求めており、このことは不妊労働を養うにすぎない富者の（奢侈的）消費支出によっては実現されえないのである。

貧困の問題を宿命的に抱え込まざるをえない成熟した社会では、貧民を救済するために、生産的労働のための賃金ファンドの可能なかぎりの増大と、これによる一次的必需品の増大こそが求めらねばならないが、このために可能ならば有閑者がほとんど存在しない稼得者と企業者だけの社会が望ましい。トランシはアメリカ合衆国がそうであり、革命時のフランスがそうであったという。革命時のあの困難な状況のなかで農業の回復と人口の増加を実現し、莫大な革命戦争の費用を支えたものはなんであったか、それは旧体制において宮廷や有閑階級によって奢侈的に消費されていた有用な労働が生み出した収入が、一瞬にして政府と勤労階級の手に移ったことである、このときフランスには有閑な市民や無用な労働に従事する人々はほとんどいなかったではないか、とトランシは自問自答するのである（pp. 357-362）。

(注) (1) 「われわれの個人的な利害の必然的対立にもかかわらず、われわれは誰も所有者と消費者の共通の利益によって結びついており、したがって貧民と富者とを、あるいは稼得者と彼らを雇う人々とを本質的に敵対する二つの階層とみなすのは間違っている」（pp. 317-8）。

(2) トランシは前節でみたように、一方で効用を創造する労働は何であれ生産的であるとしながら、ここでは労働を「利潤を伴ってそのファンドを再生する」（p. 347）生産的労働と、真の不妊階級である有閑者の享楽のために仕え「獲得された富を減少させるにすぎない」不妊の労働とに区別している。このよう

にトラシの体系には、セイなどの効用理論の立場と、ケネーあるいはスミスのな剰余生産の観点からする労働規定の立場との二つの異質な次元が錯綜している。このうち、貧困の問題の解決のために生産的労働の雇用の増大と不妊の労働の削減が求められるとき、富観や社会観でみられた欲求ないし効用の論理は影をひそめるであろう。また彼は企業者の消費支出は「全体としてそれほど多くない、なぜならインダストリーに従事する人々は通常、質素であり、しばしばそれほど豊かではないからである」(pp. 336-7)と述べている。それゆえ彼が稼得者と企業者との連帯を力説するとき、必ずしも貧者と富者との連帯を意味してはいなかった。

(3) 『剰余価値学説史』第1編第4章第13節をみよ。

(4) 拙稿「ケネーの消費論」『下関市立大学論集』第40巻第1・2合併号(1996年11月)をみよ。

(5) この論理の前提は生産された生産物はその価値を実現し、生産に寄与した人々に他の等価物に対する購買力を与えることであるが、そのためにはその生産物は他の人々の欲求を満たしうる効用を持ち、他の人々の需要に応じるものでなければならない。すなわち需要に応じた生産物は自らの価値を実現することによって、その生産に協働した生産的用役の提供者に所得を与え、全体として他の等価物に対する購買力を与えるのである。この際、その生産物の価値の実現それ自体は、他の生産物の価値の実現から生じたその生産物に対する購買力によって、すなわち購買力の相互性の関係によって保証されている。したがって、生産物が生産物に対して販路を拡大し続けるためには、「単純な消費だけでは十分ではない、人々の間に消費欲を生じさせる嗜好や欲望の発達を促す必要がある、このことは販売を増加するためには、消費者が買うことができるように彼らの利得の獲得を助長する必要があるのと同じことである。国民を購買の資力を得るために生産に駆り立て、それによって常に更新されまた家族の幸福を助長しうる消費を生じさせるのは、国民の一般的かつ恒常的欲望である」(J.B.Say, *Traité d'économie politique*, Paris, 1972, p. 145, 増井幸雄訳『経済学』上巻, 318-9頁)。こうして人々は自らの欲求を満たすための資力を得ようと、他の人々の欲求(消費需要)を満たすために不断に生産に励む。この意味で、セイは生産の拡大の動因を消費欲求の拡大と多様化に求める18世紀以来の「欲求の論理」の枠組みを踏襲しており、セイが消費欲求・需要を生産の拡大の規定要因として重視していることは明らかである。ただし彼にとっては生産の拡大を直接に導く内在的条件はもっぱら企業者による再生産的消費(投資支出)の増加であり、これがなければ(絶対的)欲求は何ら現実を満たされることはありえない。この意味で人々の消費欲求・需要は企業者

に生産の拡大のインセンティブを与え、生産の方向性を定める指標であるが、この方向性に誤りのないかぎり、生産された生産物には購買力の相互性の関係を通じて常に販路すなわち有効需要が相互に与えられる。したがって、企業者が人々の消費欲求を見誤ることのないかぎり、言い換えれば、事物が自由に放任されて価格メカニズムを通じておのずから消費欲求に応じた生産が行われるかぎり、過剰な再生産的消費（過剰蓄積）による一般的な過剰生産はありえず（制度的要因などによって企業者が生産の方向性を見誤った場合、部分的な過剰生産が発生しうることはいうまでもない）、生産物は必ずやその価値を実現して他の等価物に対する購買力を提供し続ける。それゆえ再生産的消費の増大はおのずから生産者の所得を増加し、彼らの消費購買力を高めるのである。

(6)「人はこの年々の利潤しか支出することはできない、利潤を無用なものに用いるほど有用なもののために残される利潤はより少なくなる。もし利潤を越えてしまえば、ファンドが損なわれる、再生産としたがって将来の消費は減少するであろう。反対にもし新たな資本を形成する節約が行われれば、それらは増加しうるであろう」(p. 353)。

3. 結び

トラシの背負った課題は革命後のフランス社会の再組織化の原理を求めることであり、その際に彼の問題は、過度の不平等と貧困の同時存在をどのように緩和して新たな社会的統合を築くかということにあった⁽¹⁾。みてきたように、彼はこの課題に対する解答を、おもに稼得者と企業者の連帯あるいは労働と資本の協働によるインダストリーと賃金ファンドの増大に求めた。その理論的根拠は、スミスの価値論の影響下で、しかし自らの「意志の能力」論からの必然的展開として導き出された労働理論、スミスやセイなどを踏襲した資本理論（あるいは消費理論）、そしてカンティロン以来セイにまで引き継がれてきた企業者理論である。効用の創造の源泉は労働であり、この労働に「有用な方向を与える」のは生産の組織者としての企業者と彼らの資本（賃金ファンド）とであった。トラシはこの一方で、蓄積された富を無用に消尽するにすぎない有閑階級の存在意義を徹底的に軽視し、彼らを排除しようとした。こうして、奢侈批判にもっともよ

く示されていたように、彼の産業主義の目指すところは、資本の大部分を企業者の手に集中することによって、イギリスとは異なり、いまだ著しい富の不平等のなかで貧困にあえぐ大部分の国民を救済することにあつた。この意味で彼の産業社会の構想は、インダストリーの発展がもたらす消費物資の豊富によって、より高いレベルの人為的欲求の全般的な充足を目指す18世紀のフォルボネなどの構想とは異質である。有閑階級が不妊的な収入をより多く手に入れるかぎり、「用役の相互性と交換の多様性」がもたらす文明の成果は大勢の国民の享受するところとはならない。革命後のフランスの現実と貧困の必然性を説くマルサスのペシミズムとは、富観や社会観でみられた欲求の体系の論理を屈折させ、トラシに利己的情念の自由によつては解決されえない分配問題の重要性を自覚させたのである。

しかしトラシは、投資機会と雇用機会の枯渇した成熟した国でどのようにして新たな投資機会と賃金ファンドの増大がもたらされるか、という肝心の理論的問題には十分な解答を与えなかった。彼は技術革新による低価格の実現が所得効果を惹起し、新たな販路と賃金ファンドの増大をもたらしうること指摘した以外には、投資誘因としての消費需要や消費購買力の意義に言及することはなかったのである。それはまた彼の支出循環論の欠陥でもあつたことは指摘した通りである。トラシはこのような理論的問題に踏み込むことなく、もっぱら有閑階級の排除を通じて企業者の生産的ファンドの増大を願つたが、これについても、このような社会の階級構造の変革が所有権に抵触することなくどのようにして可能であるかは述べていない。ただ税が企業者の生産的消費のファンドを損なうことがあつてはならないとし、また公債を「社会の眞の利益の生まれながらの敵である」(p. 432) 無用な大勢のラント取得者を養うにすぎないと批判して、その廃絶を主張するにとどまっている。こうして、フランス社会の再組織化の原理は提示されたが、その原理の実現によって過度の不平等と貧困の同時存在を緩和するための経済的、政治的な具体的道筋は十分には示されなかった⁽²⁾。トラシはこの課題を「立法論」で果たすことを約束したが、

稼得者と企業者を中心とする新たな産業社会における社会組織のあり方が示されるはずであったこの「立法論」は、ついに世に現れることはなかったのである。

(注) (1) このことはトランシにとっては、革命の掲げた理念としての平等と事実としての不平等との乖離を埋める試みでもあった。カイザーは「(イデオログの)産業主義とその理論的フレームワークは、フランス革命の理念を現実のものとするための手段としてよりも、むしろフランス革命が引き起こした社会的、政治的混乱を終息させる方法として生まれた」(Thomas E. Kaiser, "Politics and political economy in the thought of the Ideologues," *History of Political Economy*, 12:2, 1980, p. 143) というが、しかし産業主義は混乱の終息ないし社会の再組織化を、封建的諸要素の打倒という革命の成果の上に、労働と資本の協働による産業の発展によって革命の諸理念をより現実のものとする方向で求めたのではないか。富と権力の不平等を緩和し、新たな国民的統合を確立する道筋を見出そうとしたトランシの議論は、そのことをよく示しているように思える。

(2) みてきたように、トランシの経済学はおもにセイに依拠しつつ、コンディヤック、スミス、マルサスなどの議論を組み込んだものであり、理論的に首尾一貫した体系的構成をなしていたわけではないし、また必ずしもそれらの先人のレベルを突き抜けた新たな理論的地平を切り開いたわけでもなかった。河野はトランシを重農主義とルソー主義との両面闘争のなかから形成されるフランス「古典経済学」のセイと並ぶ代表者であるとし、「トラシーはフランスにおけるいわばリカード段階を表現する理論家である」(河野健二「経済思想」 桑原武夫編『フランス革命の研究』, 1959年, 岩波書店, 229頁) とするが、過大な評価のように思える(一方、アリックスはトランシは「当時の文献のなかではその業績以上の地位をしめていたように思われる、それはおそらく著者の名声によって説明される」と述べている。Edgard Allix, "Destutt de Tracy, Economiste," *Revue d' Economie Politique*, 26, 1912, p. 448)。絶対王政の支配する旧体制の時代から革命の時代へと続くフランスでは、経済学は多かれ少なかれ社会の構成原理にかかわる観念的な秩序の理論(ないし社会組織の理論)としての一面を持たざるをえない(あるいはそのような政治的、社会的状況によって経済学のあり方が強く規定されざるをえない)。それゆえ、一般にイギリス資本主義ないし産業資本の形成と展開に重ね合わせて論じられるイギリス古典経済学の形成と対比して、フランス「古典経済学」の形成という問

題を設定することが妥当かどうかは、それ自体、問われるべき重要な問題であるが、今はただトラシに即して次の点を指摘するにとどめたい。すなわち、トラシはスミス経由でより敷衍化された形で受け継がれたケネーやチュルゴの資本理論を含めて、18世紀以来のフランス経済学の理論的成果を踏まえつつ、革命後の社会の再組織化というフランスに固有の課題に対して、革命の成果と精神の上に、稼得者と企業者の連帯による産業の発展によって応えようとしたこと、これによって彼が目指したものは過度の不平等と貧困の同時存在の問題の解決であり（ただしその課題は十分には果たされなかった）、そこにわれわれはフランス「古典経済学」の、というよりもむしろルソー主義と重農主義の両面批判を通じて形成されるこの時代の産業主義の、セイのそれとは異なる一つのあり方を見出すことができるということである。